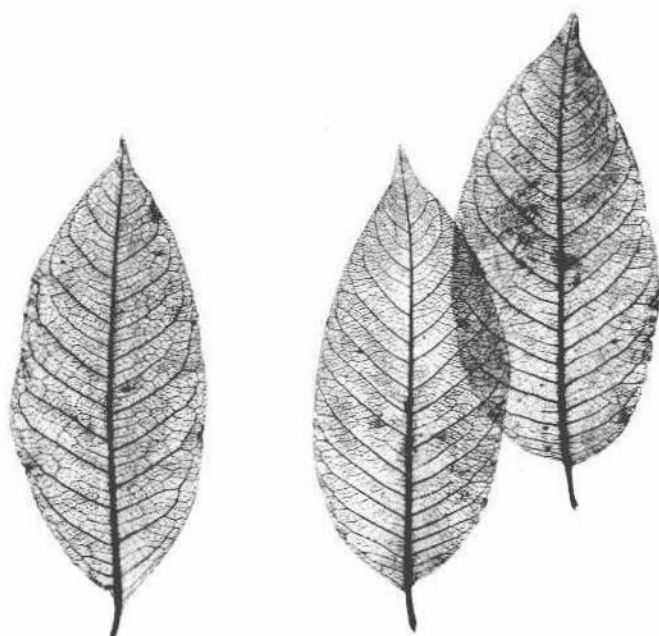


文学的
人生論
三島
由紀夫


知恵の森文庫



ぶんがくてきじんせいろん

文学的人生論

みしまゆきお

三島由紀夫

2004年11月15日 初版1刷発行

発行者—加藤寛一

印刷所—萩原印刷

製本所—関川製本

発行所—株式会社光文社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 編集部(03)5395-8282

販売部(03)5395-8114

業務部(03)5395-8125

振替 00160-3-115347

© iichirō HIRAOKA 2004

落丁本・乱丁本は業務部でお取替えいたします。

ISBN4-334-78321-X Printed in Japan

Ⓒ本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

文学的人生論

三島由紀夫

光文社

文学的人生論
目次

I

一青年の道徳的判断	8
重症者の兇器	15
新古典派	23
批評家に小説がわかるか	29
死の分量	36
卑俗な文体について	40
モラルの感覚	47
好きな女性	50
新ファツシズム論	57

II

川端康成	72
谷崎潤一郎	90
伊藤静雄	96
福田恆存	100

折口 信夫.....106

『風媒花』.....108

『志賀直哉論』.....117

『夜半楽』.....119

『草の花』.....122

オスカア・ワイルド.....125

レイモン・ラディゲ.....146

ジャン・ジュネ.....149

『背徳者』.....163

『獄中記』.....166

『異邦人』.....168

『泥棒日記』.....174

『芸術論』.....176

Ⅲ

演劇の本質.....180

雲の会報告.....184

芝居と私	187
宗十郎の「蘭蝶」	192
「班女」拝見	195
ノラ・ケイの公演をみて	203
芝居の恐怖	205

IV

羅府	208
謝肉祭	213
シルク・メドラノ	231
フォンテエヌブロオへのピクニック	237
アテネ	242

解説 福田和也	252
---------	-----

I

一 青年の道德的判断

現代の青年が愛と憎しみとに對してもつてゐる一種の資格ともいふべきものについてのお訊ねですね。よろしい。私が私流の診斷書を提出しましょう。

私は二十八歳です。戦争中は幹候出の少尉でした。復員後、大学を了え、あまり香ばしくない会社につとめています。両親は神戸におり、私は東都で下宿生活をしています。独り身です。親爺の若干の補助がありますが、安サラリイとこれを合計しても、どうにかこうにか生きてゐると謂つた程度です。

いったい世間で惚れたのはれたのと騒いでゐるのはありやどういふ連中でしょうね。よほど暇と金があつて生活を謳歌してゐるのでしょうか。そんな連中が沢山あるとも思えません。やっぱり彼らも絵に描いた酒で酔つてゐるのでしょうかね。私は、といえば、私の下宿は素人下宿でして、私はこの娘のオールド・ミスと関係があります。私の方ではちつとも愛してゐないのですが、彼女は私にべた惚れです。日曜日になる

とどこかへ連れて行けとうるさくねだりますが、外へ連れて出る代物じゃありません。私は映画を見に行くのだって一人です。ところがどこを見渡しても、間抜け面が豚娘を連れて歩いていますね。あれからどんな子孫が繁殖するかと思うと空恐ろしくなります。もう人間を生むのを止めて緬羊でも生むようにしたら、移民政策がよほど容易になるでしょうに。……私の下宿のオールド・ミスは継子で女中扱いをされていて、今までの下宿人からもこんな種類のお情は受けていたでしょう。継母はしらん顔をしています。おまけにこのオールド・ミスはどうやら石女らしいのです。どうです。足の裏の冷えるような話でしょう。

私もこの女をときどきちらりと憎む瞬間があるところを見ると、愛していないでもないのでしょうか。放蕩する金がないのでこんな薄汚ないことになるのです。私は一人でいると、ときどき大声を張りあげて、俺は何も愛してやしないぞ欺されやしないぞと叫んでみます。すると何か漠然とした憎しみが、自分に対してだか、何に対してだかうっすらと立ちこめて来て、ふとして俺も何かを愛しているのかなとそれが私に思わせるのです。私は忽ち勤勉に愛と憎しみを自分のなかで好都合に整理します。俺だって不平を愛し音楽を愛し悪女を愛し悪酒を愛し麻雀を愛し仕事を愛し（これはそもそも仕事の性質が愚劣だから出来ることです）サラリーマンらしく映画見物を愛し

日曜日の昼寝を愛し、同時にこれらの全部を憎んでいる。それから上役を憎み馬鹿高い靴直しを憎み自動車に乗っている男を憎み電車の中でいやというほど足を踏んづけた人間を憎み、同時にこれら全部をうつすらと愛している。まったく等分にです。するとプラスマイナス差引ゼロになって生活の帳尻が合うのです。私の生活は透明になり、おかげで枕を高くして寝られるわけです。

いったいこんなにせつかに生活を透明にしようとする欲求は何でしょうね。私は自分ではつきり云えます。私は道德がこわいからです。もっと若いころは、私も健気に道德的であろうとしたものでした。人間の道德とは、実に単純な問題、行為の二者択一の問題なのです。善悪や正不正は選択後の問題にすぎません。道德とはいつの場合も行為なんです。私流に申せばね。人生で両足にわらじを穿けば道德も免除されるし第一あるきよい。道德が困難なのは、片足のわらじを捨てることだからです。これで歩けばどちらかの足が血まみれになるに決っています。しかも択一前の行為は決して本当の行為ではないのです。両足のわらじによる歩行は、行為ではないのです。両足のわらじで歩いている彼は、一向自由ですらないのです。怒らないで下さい。私流の言い方をしますよ。人を殺したことの無い人間は、牢屋の中の殺人犯よりも、ずっと少量の自由しか持っていないんです。

私も御多聞に洩れず戦争へ行つて人を殺しました。しかしこれはすこし右の例とはずれて来ますね。それにしても出征するとき、私は道德的になれることの期待で胸を躍らせたものです。ところが軍隊というものには行為の二者択一がまるきりなくて、実戦で二者択一が事実上許されるような切迫した事態にぶつかつても、私の勇氣のなさは、ついに道德的になることができず、行為以前の発砲で敵を殺すことしかできなかったんです。私は軍隊という機構のいちばんずるい扮飾を見たような気がしました。それは択一のレディーメイドの方式を前以て与えてくれ、生来の両足のわらじを片足のわらじのように見あやまらせる点にあるのです。大抵の青年はこの扮飾にひつきかりました。私はもつと悪いことには、この扮飾を見抜きながら、好んでそれに瞞されたんです。呆れた腰抜けであり、且つ勇猛果敢な帝国軍人だったわけですね。

択一された行為で敵を殺さなかつた結果として、私はとうとう敵を憎むことができなかったのです。敵愾心なんて、冗談を仰言いますな。そんなものはありません。私は行為以前の発砲で敵を殺していました。殺人犯よりも私は無道德でした。敵を憎むことができなかった結果、私は敵を愛することができませんでした。何のための戦争でしょう。私は敵を愛することを学ばないで帰つて来たんです。私が択一された行為に依り道德的に敵を殺していたら、敵を愛することを学ばなかつた筈はなかつたで

しょうに。行為は愛に帰結を見出ださない筈とてはないのですから。

こっぴどい幻滅でした。この時から私は、道德をおそれるようになったんです。道德から免疫になるために、私は両足のわらじにしじゅう気を配って歩くようになりました。愛するときはこっそり憎んでおくことも忘れないようにし、憎むときはこっそり愛しておくことを忘れないようにしました。誠実な人間愛のちよつとしたお手本です。行為をもたない人間は、こんな風にして塵芥箱ごみみたいなへんに薄汚なく誠実な自我の実体をそなえてくるものです。自意識が強いから愛せないなんて子供じみた世迷い言で、愛さないから自意識がだぶついてくるだけのことです。不換紙幣のようにね。私だってそんなことは百も承知です。それでも私はいくらだぶつこうと銀行員のような冷静な顔つきで、こいつを丹念にプラスとマイナスに分類して、加減乗除して、差引ゼロにして、さてぐつすりと一夜の安眠をとるという生活法を頑固に固執することにしました。

ところが時あって、悪夢が私の熟睡をおびやかすのです。道德が出てくる夢なんです。泥棒に追っかけられる夢よりよっぽど怖いから、一度見てごらんなさるといい。私はその抗しがたい誘惑に負けまいとして恐怖の叫びを咽喉から絞って目をさますんです。

私とて御覧の通り若いんです。抒情詩に凝るほど若くはないが、俳句をひねくるほどの年でもありません。しかし私には厄介なことに、一種の矜^{ほこ}りがあるのですね。生活を憎むことを知らないで愛することしか知らないようにみえる見事な人間の、無智から来るおそるべき背徳——私が背徳という意味は、魂の儉安^{とうあん}が自然に可能であるような状態、魂の自己満足状態のことです——、ああいう一群には金輪際入りたくありません。女一人を弄りものにもするけれど、こう見えても私は、社会秩序の多少気味のわるい味方なのですから。とにかくあの連中と来たら、たとえばA青年は法学部の学生で、兼、閨小会社の重役、兼、共産黨員、かつシヨパンの崇拜者で、それでちゃんと神経の辻褄が合ってるんですから。またB青年は半官半民の勤め先で、友人名義の兼任ヤミ商会へ配給物資の横流しをやりながら、たのしげに暮らしています。昂然たる揚言——「俺は生活を愛してるのさ！」——にさからって、「それを憎むこともあるのか？」とたずねようものなら、「ないね」という高飛車な挨拶に出会^{であ}わすほかはありません。

しかし世が世なら、こうした心の単純さも、またのらくらしている人間の無限の閑暇も愛のためには、ひいてまた道德のためには役立つ筈のものなんです。それが今では心の単純さは徳性にふりむかず、ゆたかな閑暇は情熱を分散させるのに役立つだ

けです。行為以前の生活に誰もが甘んじるようになり、それを平和な人間らしい生活だと思ひ込むようになったわけです。実に快適な危ない気のない墮落ですね。

私だとて一年に一度ぐらいは、あ、この女だと思ふようなナイスな女にぶつかることがあるんです。概して行きずりの女ですがね。この女相手なら私の憎悪は千番に一番の見事な結晶を成就するかもしれないような美しさ、私の全身の淫情をおののかせるような道德の美しさです。ところが運命はそういう女たちを一二秒でかつさらってゆき、又しても私の目に映るものは数万頭の豚娘になり、私にまわりつくのは一人の石女にすぎなくなります。私は道德もまた運命だと決定論的に考えて、自分をほったらかしておくのです。

いつになったら私は道德におびやかされなくて済むようになるのでしょうか。いつになったら私は愛と憎しみの混合ミックスでなく、愛と憎しみの異体同形ホモロジに達するのでしょうか。それには何でも自分の問題に還元してしまうあの怠惰からのがれる努力でしょうね。あらゆるジャスティフィケーションの卑しさに対して敏感であることでしょうね。私はユダのように道德的でありたいのです。ともすれば私の属する世代は、それを裏切る権利が唯一の利潤であるような、そういう世代であるかもしれないのですから。

重症者の兇器

われわれの年代の者はいたるところで珍奇な獣でも見るような目つきで眺められている。私の同年代から強盗諸君の大多数が出ていることを私は誇りとするが、こういう一種意地のわるいそれでいてつつましやかな誇りの感情というものは他の世代の人には通ぜぬらしい。みだりに通じてくれば困るのである。

しかし、いつか通じる時が来る。サナトリウムに、今までいたどの患者よりも重症の患者が入院してくる。すると今までいたあらゆる患者の自尊心は、五体の健全な人間がさわがしくそこへ入って来るのを見ることによってよりも、はるかに甚だしく傷つけられる。かくしてかれらは一人一人のもっていた病気の虚栄心を、一転、健康の虚栄心に切りかえる。俺はお前より毎日二分ずつ熱が高いよと自慢していた男が、その日から、俺はお前より毎日二分ずつ熱が低いよと言ひ出した男に負けるのである。こういう価値の転換は、あの重症者を無視するための非常手段としてたしかに意味の